

灰神楽



串田孫一

瀬戸物の火鉢が何年か前まではとってあったが、いよいよ邪魔になったので庭に出した。それを半分土に埋めて泥と水を入れ、慈姑くわいを育ててみたりしていたが、何かの時に割れて、姿を消してしまった。勿論、それは子供の頃の火鉢ではない。

冬仕度の時に、幾つかの客用の桐の火鉢などを押入れの奥から出して、灰飾かひざりの手伝いなどを面白がっていたが、その大きな瀬戸物の火鉢は一年中出してあった。夏のあいだの二、三ヶ月は、部屋むらの片隅に寄せられていたが、秋になると、それに火が入る日が段々に多くなり、いつの間にか、夜になってすることがなくなると、手を醫なぐさすために坐布団をそのそば

へ引き寄せる。

リュウマチで手の指の関節がふくらんでいた年寄がいたが、その火鉢の番人のように坐っていて、時々煙管で煙草をのんでいた。私が火にあたりに坐ると、きまって、あぶりましょ、かえしましょと言った。冬毎に、全く同じ調子で繰り返されるその言葉を聞くのが次第に淋しくなり、辛くなって来るのだった。

寒い風の吹く外から駈け込むようにして帰って来て、赤くふくらんだ手をいきなり火鉢のへりに置くと、そこが飛び上るほど熱くなっていることがあった。私は段々にそんなことにも用心をするようになったが、つい忘れて手を置いては

失敗をした。

私は冬になると霜焼けになった。今はどういう関係か、霜焼けでそれが崩れて繻帯を巻いているような子供を、少くも東京の都心では見掛けなくなったが、小学校の頃までの友だちの手を想い出してみると、半分以上が冬は繻帯を巻き、それがよごれてぶらさがっているのもあった。

よく摩擦をすれば霜焼なんかにならないと言われたが、そんなことでは駄目だった。熱い湯に生姜をおろして入れ、我慢してその中に手を入れさせられたり、痒く腫れているうちは、細い硝子の瓶に入ったレメドールという油っぽい薬をつけ、もっとひどくなると、黒いどろどろのインチオールをべつとりつけ、ネルの布切をあてて繻帯をかけた。

そうなると手袋がはめられなくなって、また新しい箇所が赤く腫れ出し、冬のあいだはどっちみち手がさばさばすることもなかった。

その火鉢の傍らに背をまるめて坐っていたおばあさんの指先などに、皸あかぎれが出来、手が全体にかさかさになっていった。その皸には、豆腐屋に売っている黒い堅い膏薬をつけていたが、火箸を焼いてその膏薬をとかしながら、裂けた口にごすりつけていた。痛がりもせず、時々口をとがらせて、ふっ

ふっと吹いていたが、見ている方が顔をそむけてしまうのだった。

その火鉢には重い鉄瓶がかけてあった。鉄の頑丈な五徳が埋っていて、灰ならしも大体灰に立ててあった。だから火がおこり過ぎて灰をかけるような時には灰ならしも熱くなっているの、それを持つ年寄の手つきは独特だった。

私はその火鉢のそばで蜜柑を食べた。とったすじを火にくべたりするので、匂いが立ちのぼった。年寄は蜜柑を食べる時には、袂から手拭を出し、それを畳みなおして膝の上のせてから皮をむいていた。私はまたその火鉢の上で鉛筆を削った。よく切れる切出しで削った。その屑の燃える匂いはよくて、何となく意欲が湧いて来る感じであった。

その年寄のところへ、極くたまにお客が来た。隣の部屋から襖越しに聞いているとお客の声ばかりが聞こえていたが、ある時突然大騒動が起った。行ってみると部屋中灰が飛び、障子をあげていた。

どうも灰神楽をあげてしまったと言いながら、お客は幼い私にも恐縮して掃除をはじめていた。火鉢とともに灰神楽も見られなくなった。

(原文のまま)